

# みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版



## タイルが彩る空き家再生 広島県尾道市

瀬戸内海を臨む一方、山側の斜面地には寺社仏閣や住宅がひしめいて建つ広島県尾道市。近年、空き家を再生したゲストハウスや店舗が増え、若い移住者も増えている。その推進役を担うのがNPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」。再生物件にタイルをよく使用していると聞き、見学させていただいた。



尾道へは山陽新幹線の福山駅で在来線に乗り換え、20分ほど。駅を出て目の前に広がる港には大型船が停泊し、対岸の向島には造船会社の倉庫が建ち並ぶ。振り返れば山手地区の斜面地には路地がめぐり、日本家屋や洋館が海に顔を向けるように建つ。古民家を再生した小さな店舗やカフェめぐりをしながら、街歩きを楽しむ人も多い。

いまや山手地区は尾道観光の定番だが、斜面地の車も入らない路地は、高齢者が生活するには不便。かつては主が引っ越した後の空き家が増えるばかりであったという。

そうした中、2007年に設立した「尾道空き家再生プロジェクト」（翌年NPO化）は空き家を再生したゲストハウスの運営や、移住者と大家さんをつなげる「空き家バンク」の活動等を開始、冒頭に述べたとおりの大きな成果を上げている。

### こんなところにもタイル！

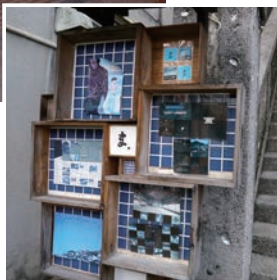
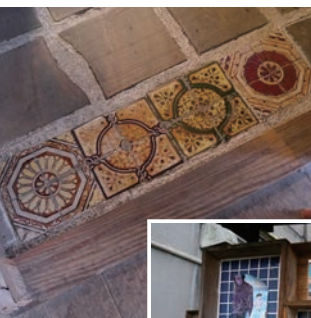
NPOが直営で再生した物件は住宅を含め現在18軒。その中からゲストハウスや店舗など、一般でも訪れることが可能な、そしてタイルが使われている4軒を見学させていただいた。

どこも独創的で遊び心があふれた空間だ。タイルがどう使われているかというところ、ゲストハウス「みはらし亭」に併設するカフェには船室をイメージした水色のボーダータイル。子育て世代の交流サロン「北村洋品店」では子どもたちによる可愛いモザイクタイル画が床を彩る。

ゲストハウス兼カフェの「あなごのねどこ」では「こんなところにも!?」と驚くほど小さな隙間にモザイクタイルがぎゅっとはめ込まれているのを発見。

よほどのタイル好きがいるに違いない……と思わ

代表理事・豊田雅子さん  
「ぶっくりした厚みのあるタイルが好きです。ムラも大事ですね」。NPOスタッフの慰労旅行でもタイルが素敵な旅館を選んだとか。



ゲストハウス  
「みはらし亭」  
の名刺







## 尾道ガウディハウス

1933(昭和8)年に建てられた洋館付き和風住宅。独特の外観から、映画やアニメにも登場する「名所」となり、地域住民にも親しまれている。長年空き家状態で、これを豊田さんが購入したことがNPO設立のきっかけとなった。2020年2月、一軒貸しのゲストハウスとしてオープン。



八畳間の和室。  
書院の組子細工も美しい。

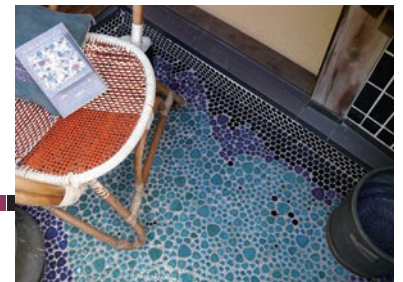


洋室の床。元々張られていたリノリウムの色に準じている。色が想像と異なり、注文しなおしたのは、赤茶色のタイル。



新たに設置したバスルーム。「この時代の洋館付き住宅にお風呂があるなら、どんな設えになるかを調べました」。

洗面台手前の曲面部分のタイル張りに職人技が光る。



タイル張りは職人に依頼したが、小さなテラスだけは豊田さんの手による。

せるが、それがNPO代表理事の豊田雅子さん。開口一番に「タイルは好きですよ!」と心強いひとこと。「水周りはもちろん、空いているスペースがあれば、すぐタイルを張りたくなります」。

デザインを考え、タイルを選び、ときには自ら施工することもあるという。「別の人生があるなら、タイル職人になりたいですね」とまで言い切り、その腕前は各物件で発揮されている。

### 「尾道ガウディハウス」のタイル

再生の際、タイル張りや壁塗りはNPOスタッフが手がけたり、ボランティアを募ったりすること多い。多少失敗しても味わいが出るのがタイルのよさ。皆でタイルを張れば、建物に愛着もわいてくる。

一方で、職人さんがきっちりと仕上げるケースもあり、それが「尾道ガウディハウス」だ。

斜面地に建つ洋館付き和風住宅で、以前から尾道の象徴であり、NPO設立のきっかけとなった特別な存在。国の登録有形文化財ということもあり、再生は急がず妥協せず、10年を費やした。

2020年2月、満を持して一棟貸しのゲストハウスとしてオープン。コンセプトは“アンティークに泊まる”とし、新設したバスルームや洋室には豊田さんが選び抜いたタイルを使用した。「タイルをインターネットで注文したのですが、届いてみると想像していた色と異なったので、発注しなおしました」というエピソードからも思い入れが伝わってくる。

### 再生は建物の個性に合わせて

NPOによる再生物件を紹介するマップ「尾道再生百家繚乱」には、「リノベーションの手法は物件の個性に合わせてすべて違うのが大きな特徴です」と書かれている。

4軒の建物を見学し、それを実感した。建物の来歴や特徴を表現したり、DIYの楽しさを伝えたり、または高級感のある空間を演出したり。タイルも建物ごとに多様な役割を果たしている。

おりしもこのコロナ禍で、都市からの移住者が増えていると聞いた。これからも尾道の建物がタイルで再生されていくことだろう。





## みはらし亭

1921(大正10)年に建てられた別荘建築をゲストハウスに再生。崖の上に建ち、客室からは絶景が望める。国の登録有形文化財。



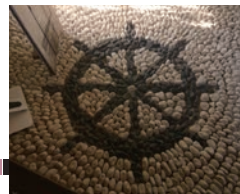
1階のカフェスペース。家主が廻船業の社長だったことから船室をイメージ。



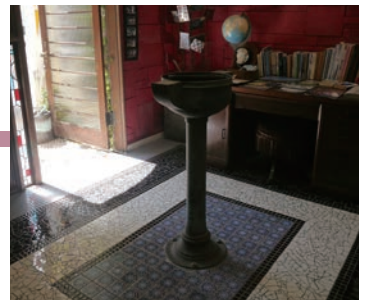
敷石のモザイクタイルはワークショップ参加者によるもの。



正面入り口の両脇にもタイルが。



カフェの入り口。船の舵を石を敷き詰めて表現。

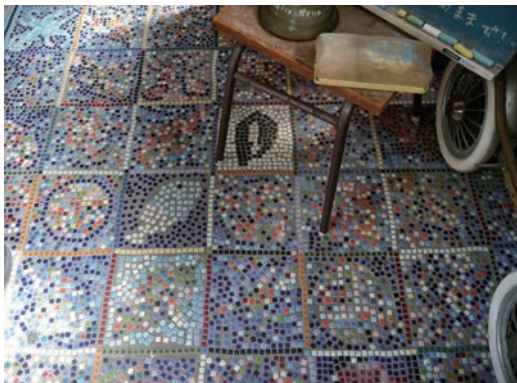


隣接する案内所は洋館風に再生。床のタイル張りは豊田さんの手による。



## 北村洋品店

昭和30年代築の旧北村洋品店を子育てサロンに再生。家を建てることの面白さを感じてもらえる場所にしようというコンセプトの元、再生には多くの人が参加した。



床のモザイクは、幼稚園の子どもたちの作品。海の中の生物をモチーフとしている。



当時のレトロなタイル流しもそのまま利用(左)、天板は解体現場から下地ごともらってきたもの。鏡も別の解体現場から救出。「拾う神です!」(中)、タイルで彩られた台に陶器のガインがオブジェのように並ぶ(右)。

## あなごのねどこ

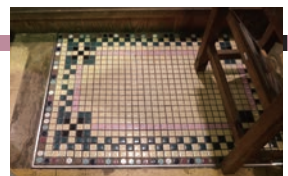
ゲストハウス、カフェ、交流スペース、本と音楽「紙片(しへん)」がある複合施設。明治時代の呉服屋さんの町家を再生した。



仕切り板の隙間にモザイクタイル!



店舗正面の腰壁にタイル。



カフェの床にも。

シャワー室(右)とキッチン(下)のタイル(下)。



写真:尾道空き家再生プロジェクト



# Design Award 2021 受賞作品決定!



DESIGN  
AWARD  
2021



タイルを使用した施工事例のコンテスト「デザインアワード2021」(主催:名古屋モザイク工業株式会社/岐阜県多治見市の総合タイルメーカー)。

第6回となる今回は、昨年を大きく上回る358件(住宅部門263件、非住宅部門95件)の応募があった。

同社社長・早田辰比呂氏、猪熊 純氏、五十嵐久枝氏、塩田健一氏、4名の審査員により、金賞・銀賞・銅賞・入賞・特別賞が決定され、9月15日に同社ウェブサイトにて発表。各部門の金賞～銅賞作品を設計者のコメントとともに紹介する。

## 多様化する快適さの中で

今年は、新しいライフスタイルが定着しつつある環境下で、多様化する快適さや居心地の良さの追求という難しい課題に取り組み見事に成功した事例を多く見ることができました。また、こだわりの詰まった空間の中で、タイルがベストな位置でベストな役割を果たしている作品には、これまで気づかなかった発見があり、大変大きな刺激を受けました。



早田辰比呂氏

(審査員/名古屋モザイク工業株式会社 代表取締役社長)

### 玉川の町屋

甲村健一/KEN一級建築士事務所



#### 光を廻し、空間を連ねる

都心に建つ住宅の設計である。間口6m×奥行20mと南北に長く、東西に隣家が迫る敷地において、南北からの採光をどのように内部へ廻すかが主題となった。本計画では全体を間仕切り壁の少ない一体空間とし、内部に垂壁やフィンといった面の要素を光の方向に沿って挿入した。面には凹凸や光沢のある仕上げを用いることで、素材の陰影と反射がグラデーションのような光の濃淡を生み、南北に連なる空間の魅力を引き出す。特にLDの中心にはタイルの衝立を設え、暗くなりがちな建屋中央でも、タイルに反射する淡い光の表情を感じられる。面の構成が壁という建築的要素に留まるのではなく、空間に光を映し込むアートへと昇華できたと思う。

設計:甲村健一/KEN一級建築士事務所 撮影:鈴木研一

### 御門屋 中目黒店

ROWEDGE INC.



#### JAPANESE HANDCRAFTED

揚げまんじゅうとおかきで親しまれている、御門屋さんの路面店です。御門屋さんの商品の持つ色合い・素材感と、「カンドライト」の持つ色目や素材感の共通した上品さ、それと丁寧なクラフト感。また、街の舗装と店舗の床が、街と繋がる様に10色でデザインしました。



設計:ROWEDGE INC. 施工:LIBERTY CORPORATION 撮影:宮本啓介

\*早田氏コメントは要約して掲載。その全文、および審査員コメントほか、入賞、特別賞およびファイナリスト作品は名古屋モザイク工業ウェブサイトに掲載。

<https://www.nagoya-mosaic.co.jp/designaward/2021.html>

## Nami Zaimokuza

松井一哲+永田敦

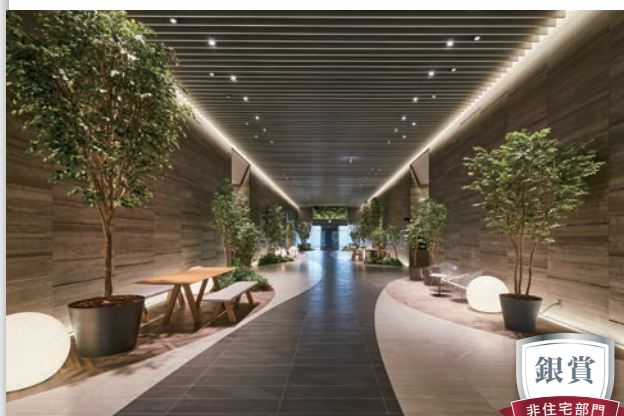


### さざ波に包まれた空間

鎌倉の海辺にある一軒家。既存のキッチンをリノベーションし、休日だけ小さな喫茶室として人を招き入れられる場を設えた。「Nami」という店名から、さざ波をイメージした形状と色合いのタイルを採用し、模様を際立たせるためにチャコールグレーのカラー目地を用いている。細長いモザイクタイルだからこそ可能だった2面の壁を繋ぐ曲面壁は、配線・ダクトを納めるためのカバーの役割も兼ねている。本タイルを用いることで、曲面に包み込まれる柔らかな空間が実現した。



設計：松井一哲+永田敦 施工：エヌアールワークス



設計：大和ハウス工業株式会社



## Research Gate Building TONOMACHI -3-

大和ハウス工業株式会社

### 風と人の通り道

最先端の研究施設が集積するレンタルラボ。建物を東西に貫く40m超のエントランスホールには研究者とともに風が流れ込み植栽を心地よく揺らします。単調になりがちな長い壁面のタイルには数mm勝たせた真鍮棒をランダムに挟み込み間接照明による陰影と素材の違いによって流れとリズムを出しています。人と風の流れは床面で表現し、その両脇にできた滞留部の床にはアンティーク調のタイルと家具を配置し、研究者が交流出来る空間を配置しました。最先端の研究もすべては長い年月をかけ培った技術の延長線であることから、タイルも近未来を感じさせるモノトーン調のものと歴史を感じさせるアンティーク調なものを融合した空間としました。

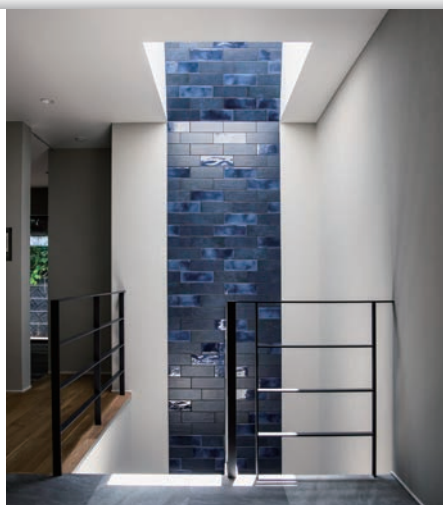
## Jaja's library+house

影山仁/株式会社ジェネビル+小村秀数+工藤俊輔



### 日常を演出する階段

二階に居住し一階で私設図書館を営むオーナーにとって、階段は職住の切り替えとなる空間である。トップライトから床まで貼り下ろされたタイルは、朝陽を爽やかに導き、夜は照明光と合わさり落ち着いた雰囲気演出しており、一日を情緒的に演出する役割を担っている。光に繊細に反応し表情を変える「キャンブディーゼル」はこの空間を実現するのに最適なタイルだった。



設計：影山仁/株式会社ジェネビル+小村秀数+工藤俊輔  
施工：株式会社ジェネビル 撮影：石田剛基

## 全国信用組合会館

株式会社石本建築事務所



### 繊細な立体格子による裏表のない建築

全国信用組合会館は東京駅にほど近い主要幹線道路から一筋内側に入った場所にある。計画地は4周道路に囲まれた単独街区であるが周辺の高層建物は計画地側に裏を向けて建っているため、どの通りにも正対し周辺の裏通りを表に変えてしまうような裏表のない建築となることを目指した。クライアントのアイデンティティを表現する繊細で美しい立体格子の外観デザインは、ディテールを追求した大型セラミックタイル打込みGRCパネルによって実現されており、この外装を全面的に採用するのは本件が日本で初めてであった。夜になると各柱前に設置された外構照明により光の立体格子が現れ、周辺の街並みに明かりを灯す存在となる。



設計：株式会社石本建築事務所  
撮影：川澄・小林研二写真事務所



# モザイク展2021開催！

～小さなかけらが生み出す世界

9月8日(水)～20日(月)、横浜市民ギャラリーあざみ野(神奈川県横浜市青葉区)にて、公募展「モザイク展2021」が開催された。選考により大賞、二席、三席、佳作2点等が選出された。

「モザイク展」は、隔年で開催されている公募展で、今回で第14回目となる。主催はモザイクアートの普及、発展を目的とするモザイク会議(後援:多治見市モザイクタイルミュージアム、名古屋モザイク工業株式会社)。

今回の応募作品数は35点。天井が高く広々とした展示空間に、作品が整然と並ぶ。モザイク作品の作成は、無数の小さなかけらを一つひとつ埋め込む作業。そうした静かな時間の積み重ねを感じつつ、作品から生み出される世界に引き込まれていく。

審査員の美術評論家・藤井雅実氏、美術ジャーナリスト・藤原えりみ氏により選考が行われ、大賞、二席、三席、佳作2点を選出。また、後援の多治見市モザイクタイルミュージアムおよび名古屋モザイク株式会社からもそれぞれの賞が選出された。11日(土)には、審査員による講評会が行われた。

入賞作品および、審査員コメントを紹介する(総評および、モザイクタイルミュージアム賞、名古屋モザイク賞についてのコメントは、モザイク会議ウェブサイトに掲載の「モザイク通信」に掲載)。

<https://www.maa-jp.com/>



杉山高行  
「風が奏でる」



藤井氏:微細なテッセラのテクスチャが覆う様々な形のピザのような板が重なる。その、板状の重なりが織りなすテクスチャと、そこに広がる小片のテクスチャ、その二重のテクスチャの戯れがあり、その中に、人の顔や木の葉のようなシルエットが、「風が奏でる」ように漂う。異質なテッセラの層が重層しながら、視覚的な風をそよいで奏でる構成のバランスが際立っていました。

藤原氏:前回では喜井豊治さんと杉山高行さんは作家として別格だと思ったので受賞対象から外しておりましたが、杉山さんの半立体的な造形要素と前回作品にも現れていた女性像のデリケートな組み合わせにはっとさせられ、大賞に選ばせていただきました。小さなテッセラの一つ一つに注ぐこよなき愛情がフツフツと伝わってくる優しい手際にも惹かれます。この半立体的な造形から今後はどのような作品展開をしていくのかもとても楽しみです。

## 会場の様子を動画で公開中！



展示会場の様子。初の試みとして会場の様子を伝える動画を作成。YouTubeにて公開中。

<https://www.youtube.com/watch?v=F-PPcetMdW0>



立花基美子  
「異世界」



藤井氏:しっかりとしたブロック状のテッセラが、セザンヌやゴッホの筆触とも通じる動的な連鎖をなして、南国の、砂丘のようでもあり波打つ海原のようでもある躍動的な“異世界”空間を生成していく。ここでもしかし、絵具の筆触とは異なるテッセラの群れが、物質的な抵抗感を持ちつつ、非物質的な空気と光の動感と響き合っていました。

藤原氏:いずくとも知れない南国風の風景「異世界」は、具象的なイメージを保持しつつ手前から奥の砂漠の風景まで、絶妙な色彩バランスとテッセラの形の多様性に目を惹かれました。具象的なイメージを保持しつつも、モザイクというメディアの特性を活かす試みだと思います。

タイルを使用した  
ユニークな作品も！

土屋忠宣  
「ターコイス Tarcois」







櫻井真智子  
「欲張り」



藤井氏: 硬いテッセラの集まりなのに柔らかい「もふもふ感」で見つめるリスちゃん。動物の柔らかな肌理が、テッセラの硬い肌理の連なりから生み出され、さらに、足元に自然の肌理の木の実はテッセラとして加わっている。異質なテッセラの群れなす「肌理の欲張り」ですね。

藤原氏: 前回は動物の表情や仕草が面白いなあと思っていました。今回は実際の木の実と立体モザイク像の組み合わせが「もの」としての存在感を強く訴える効果を発揮していると思います。動物ネタは癒しのルーツですが、さてここからどのような作品が生まれてくるのでしょうか。「可愛い」だけではない動物の実相にも迫って欲しいなあなどと、余計なお節介かもしれませぬが……。



岩田英雅  
「ファラオの野望」



藤原氏: 縦長の画面の左右をピラミッドの一部で構成し、二つのピラミッドの間から遠方のピラミッドと空が見える構図に惹かれました。また手前のピラミッドは下部のテッセラが大きく、上に従って小さくなる工夫によってピラミッドの高さまで表現できていると思います。具象的な形態を残しつつ、モザイクならではの特性が活かされている点を評価いたしました。



若月弓枝  
「Growth」

藤井氏: 植物たちの化石を含む細かな岩石の積層の中、化石の植物が化石になってなお、化石のままに成長(growth)しゆくような生命感を感じさせる立体絵画。素材であるテッセラという物が、その非有機物の特性を強く持ったまま有機的に増殖する、モザイクの特性を自ら物語る遺跡のようです。



今野栄子  
「コウモリラン」



喜井豊治  
「名前のない花」



## 同時開催

## シカゴモザイクスクール展/ 「あれこれ試しました」展

併せてシカゴモザイクタイルスクールの教授および生徒の作品10点を展示。同スクールは、2005年、モザイクアートの発展と教育に特化した非営利団体として設立された。また、「あれこれ試しました」コーナーとして、石やガラス、陶器といった一般的なモザイクの素材以外で作成した作品を展示。新たな視点や遊び心が感じられる作品が集まった。



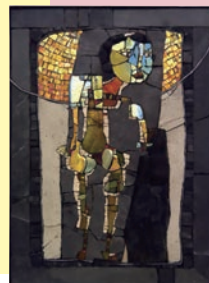
岩田英雅「秘密基地」



森 敏美  
「AMBIVALENCE 2019」



馬淵稔子「孫娘の不用品」



Casey Van Loon「左手の形 #2」



Sarah Lewis  
「Mushroom」